

イネネクイハムシの横浜からの記録

高 桑 正 敏

A New Record of *Donacia provostii* FAIRMAIRE
(Coleoptera: Chrysomelidae) from Yokohama City

Masatoshi TAKAKUWA

イネネクイハムシ *Donacia provostii* FAIRMAIRE はインドシナから日本、東シベリアにかけての広い地域に分布するハムシ科甲虫であるが、神奈川県下における従来の記録は少なく、養老 (1958) による鎌倉市 (鶴ヶ岡八幡宮源氏池) と平野 (1966) の小田原市富水の 2 例を知るにすぎない。筆者は 1984 年、横浜市内において多数の本種を確認することができたので、若干の知見を混じえ、ここに報告しておきたい。

採集記録: 6 ♀♂ 6 ♀♀, 横浜市中区三溪園, 1. VII. 1984, 高桑採集, 多数目撃; 多数, 同, 3. VII. 1984, 秋山秀雄・高桑採集; 多数, 同, 24. VII. 1984, 高桑目撃。

標本は小宮義璋博士、平野幸彦氏のほか、神奈川県立博物館新井一政氏ならびに筆者が保管している。

形態は個体差が著しく、体長は 5.6~8.0mm, 上翅は金銅~緑金~紫金~紫藍~青藍色の金属光沢を帯び、上翅端はやや斜めに切断状、内角は狭く丸まるか、多少とも鈍く短く突出し、外角は明らかに丸まる。

三溪園における生息地は、ハス池とその隣接池、ならびに内苑の池だけに限られており、個体数が多いのはハス池だけであった。

本種の食草としては、イネ、ヒツジグサ、ジュンサイ、コウホネ、ネムロコウホネ、ヒメコウホネ、ヒルムシロ属の 1 種、スイレンなどが知られているが、当地においてはハスを好んで食すほか、スイレンの葉上からも成虫とともに本種のものと思われる後食跡が少数ながら確認できた。ハスは、水面より上に出ている葉についてはまったく後食跡が見当らず、水面に浮いている葉のみを食しているものらしい。なお、本種の食草としてハスが報告されるのは、今回が初めてであ

るという。

また、養老 (1958) により生息が知られた鎌倉市源氏池では、その後発見されないことから絶滅したのではないかとの推測もあったようだが、1984 年に次のように再確認できたので、ここに併せ報告しておく。

採集記録: 3 ♀♂ 1 ♀, 鎌倉市鶴ヶ岡八幡宮源氏池, 10. VIII. 1984, 高桑採集。

当地の個体もハスを後食していたが、岸辺から見る限りにおいては、三溪園と比較すると個体数はかなり少ないもののようである。

三溪園での発見を機に、本種の生息状況の確認に心掛けたところ、はからずも鎌倉での再確認となり、また、個体の確認こそできなかったが、横浜市旭区内の池でも本種のものらしい後食跡が見つかった。これらのことから判断すると、神奈川県下にはまだいくつもの生息地が残っている可能性も考えられる。各地の池沼が開発される前に、ぜひ調査をお願いしたい。

この小文を記すにあたり、東京大学医学部の小宮義璋博士に校閲をいただいた。また、秋山秀雄氏には三溪園での調査の同行を願い、三溪園の岡野正文氏には園内での調査に多大な便宜を賜わり、神奈川県立博物館の井上久美子氏には写真原稿の作成でお骨折りいただいた。末尾ながら厚くお礼申しあげる。

参考文献

- 平野幸彦 1966 西湘地方産ハムシ類について V. 神奈川虫報, (21): 8—10.
——— 1981 神奈川県の甲虫, ハムシ科. 神奈川県昆虫調査報告書: 340—357 (神奈川県教育委員会).



図1 三溪園のハス池のハス

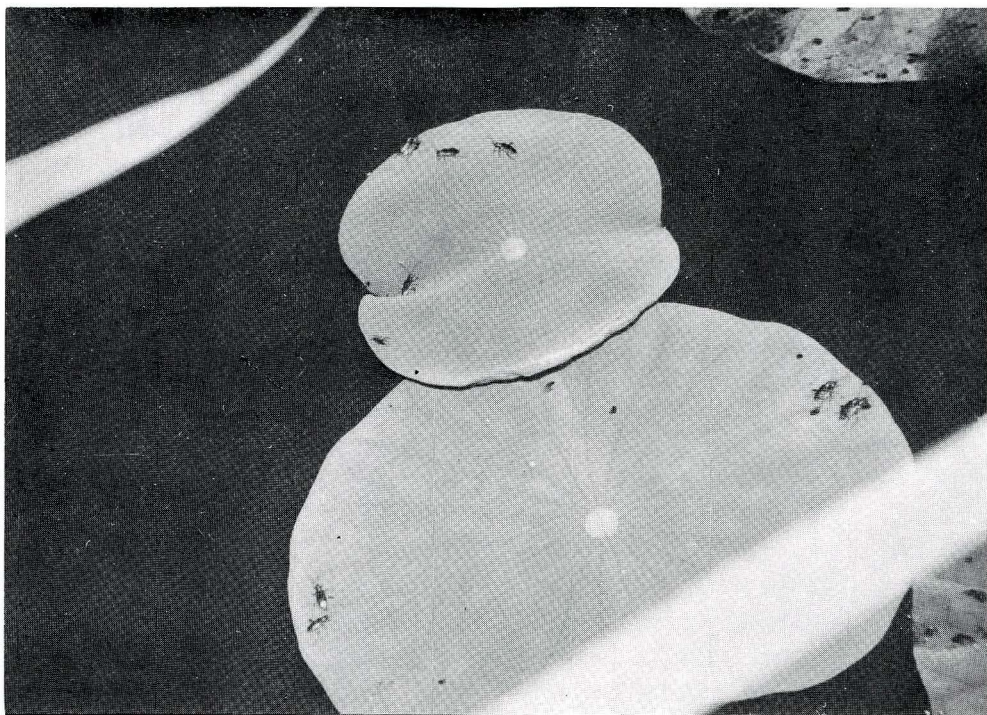


図2 水面に浮ぶハスに集まったイネネクイハムシ

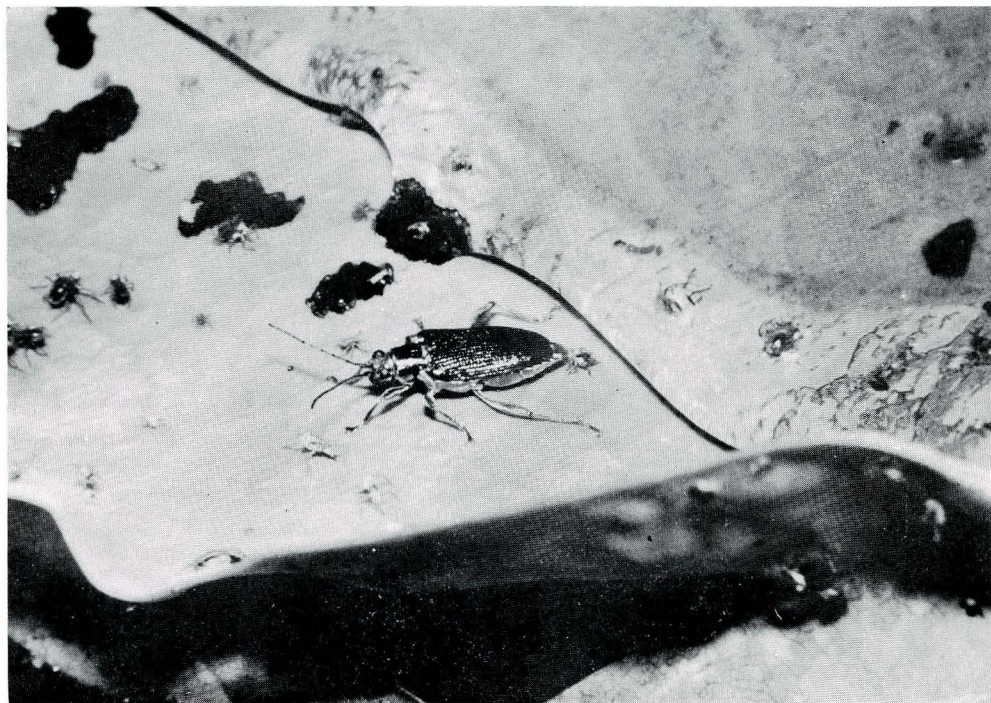


図3 イネネクイハムシと後食跡（左上方の黒色部）



図4 交尾するイネネクイハムシ（いずれも三溪園にて，3．VII．1984撮影）

- KIMOTO, S. 1983 Revisional Study on Megalopodinae, Donaciinae and Clytrinae of Japan (Coleoptera: Chrysomelidae). Ent. Rev. Japan, 38: 5—23, figs.
- 本元新作 1984 原色日本甲虫図鑑(IV), ハムシ科: 147—224, 16 pls. (保育社).
- 野尻湖昆虫グループ 1981 日本産ネクイハムシ亜科に関する研究 1. 1979—1980年に得られた分布と生活上の知見. 大阪市立自然史博物館研究報告, (34): 27—46.
- 養老孟司 1958 三浦半島のハムシ(I). Insect Magazine, (41): 15—22.

(日本鞘翅目学会)